

伊勢音頭恋寝刀

古市油屋の段

こそは立ち帰る。

後にお紺はうつとりと、暫し思案に暮れ告ぐる、遠寺の鐘も身に沁みて、心とき付く胸の闇

やゝあつて顔を上げ、

お紺「せつかく思ひ思はれて、二世と交した貢さん、退かねばならぬ浮世の義理。今伯母御様のお詞には、

『許婚の榊さんと祝言をさゝねば、養子親へ義理が立たぬ故、思ひ切つてくれい』とモ事を分けてのお頼み。とはいへこれがなんとまあ、一夜流れの仇夢も、別れは惜しき明けの鐘。炎の中に暮らそうが、あなたを退いて片時も浮世の日影が見られうか。酷いつれない胴欲な。別れといふ字を聞いてさへ胸にしみじみ悲しい」

と、恨み涙に暮れあたる。

お紺「モこの中からくれぐれと、頼ましやんした折紙の詮議。あの奥の客が慥かに持つてゐる、とは思へども、帯紐解かねば肌身は許さず。ア、どうせうぞ。

オ、それよ、この身を任すも夫のため、折紙を取り返し、潔う自害して未来の契りを待つが楽しみ。せめては死後の言訳」

と、泣く泣く硯引き寄せて、書き置く鹿の巻筆も、今宵限りの命毛と、また伏し沈み泣きあたる。

万野「お紺さん、お紺さん、お紺さんはどこにぞ」と言ひつゝ出て来る遣手の万野、

『見付けられじ』と文巻き取り、心も上の空封じ、知らぬ万野は声高に、

万野「お紺さん、お紺さん、お紺さん。オ、お紺さん、そこにかいな。そんなこと知らずに一遍と尋ねましたはいな。コレシコレお紺さんえ。モ今さら言ふぢやないが、この間からも勧めてゐるあの岩次さん、モ大抵良いお客ぢやないぞえ。それにお前も物好きな。いか

に心中立てるとて、あのかす禰宜の貢面、オホゝゝ、

お紺さん、堪忍しておくんはいや、ハゝゝゝ。モ今も今とてお鹿さんが、貢さんから度々の無心状。真

かと思ふて身の皮剥いで打ち込んだが、モ悔しいと私への懺悔。コレシコレお紺さんえ、この文を見やしや

んせ。あの口先でちよぼくさと、古市中の女郎の油をねづり廻る油虫。モその油虫のことはとんと思ひ切

り、岩次さんに靡かんすりやお前も出世。コレシコレお紺さんえ、この万野は悪いことは勧めませぬぞえ、

モゝゝゝふつゝりと思ひ切らしやんせ」

と焚き付け掛ける詞の藁

それとは知れど真顔に受け、
お紺「オ、成程、この状の様子では、興の覚めた貢さん。そんならお前の言はしやんす通り、岩次さんに乗り替ようはいな」

万野「エ、あのお紺さん、そんならお前は、ほんまにあの岩さんに乗り替える気かえ」

お紺「なんの嘘を言ふものかいな」

と、見廻す内より

出て来る喜助、出合ひ頭に、

喜助「や、若旦那さん」

貢「オ、オ、才喜助か。幸ひ。幸ひ。どうぞ首尾してお

紺にちよつと逢はしてたも」

喜助「へイ、畏まりました」

と奥口見廻し、

喜助「イヤ申し若旦那さん、憚りながらちよとあれ

へ」

貢「喜助、わしにか」

喜助「へエイ」

貢「ムウ、なんの用ぢや」

喜助「モ、今改めて申し上げますは如何なれども、い
つぞやお国の騒動よりこの伊勢路へお引越しなされま
して、あなた様には福岡へ御養子。それ故、親共も奉
公引いてこの古市にて僅かな暮らし。その後大病を患
ひ、今際の枕元へ私を呼び、『あの福岡孫太夫様の御
養子貢様は、我々親子が古主の若旦那様。随分共に心
を付けて忠義を尽くせ』と親共が遺言でござります。
それで私も、どうぞ御恩が送りたい、送りたいと存じ
ますれども、モたかゝ料理人風情の私。その大切なあ
なた様が毎日毎夜の遊所通ひ。お紺さんとの浮名は、

モ古市中一杯。福岡様には許婚の奥様もあり、御養子
の御身分で、あゝいふお身持ちではお為にならぬ。い
つぞは御異見申したい、申したいと思ふ折からこのお

出会ひ。ア、申し若旦那さん、余りせき／＼お出でな
されます所ぢやござりませぬぞえ。イヤモ、何を猪口
才などと思し召しませうが、斯様に慮外を申ししますも
つゝまる所はあなたのお為。ほんに私は夜の目も合は
ず、案じてばかりおりますはい。ム、ハ、ハ、ハ。
これはしたり、モ何事もご存知のあなた様、必ずお氣
にさへられて、へイ、へイ、へイ／＼、下さりま
すな」

貢「ムウ、すりやそちは喜兵衛が伴であつたよな。こ
れはしたり、さすれば我がためにも家来同然。古主を
忘れぬそちが異見、悪うは受けぬ、忝い。ガマそれは
格別、こりやこれ、大切なひと腰、わしが持つてゐて
は人目に立つ。帰るまで預かつてたも」

喜助「へイ、私がしつかりとお預り申しました」

貢「ア、これ、そのひと腰は青井下坂」

喜助「エ、そんならこれが」

貢「いかにも。刀は手に入れども、これに付いたる折
紙を騙られ、モ色々と詮議をすれども、今に於いて行
き方知れず。何卒折紙を取り返さんと、毎夜こゝへ入
り込むも、もしや詮議の手掛かりもあらうかと心を砕
く某。ア、これ、必ず他言は無用ぢやぞや」

喜助「ヤ、これは／＼、左様とも存ぜず、慮外の段は
真平御容赦。して、その折紙を騙つた奴が、この油屋
の内に」

貢「さあ、確かにそれとは知らねども、もしやと思ふ
はあの奥の。ア、これ喜助、ちよつと耳を貸しや」

喜助「へエイ。へエそんならあの岩次が」

貢「ア、これ、シイ。秘かに、密かに。何かは奥の大
騒ぎに」

喜助「首尾を作るは最究竟」

貢「そんなら喜助」

喜助「若旦那さん、さあ、かうお出でなされませ」
と先に立つ、

案内につれて福岡貢、暖簾の内へ入りにけり。

こなたの障子引き開けて、伺ひ出でたる徳島岩次、何か
心に打ちうなづき、差し足抜き足暖簾の内、忍び入つて
二腰の刀をそつと後先見廻し、おのが刀と貢が刀、手早
やに目釘こつちこち、身を掬り替える即座の悪知恵、
暖簾の影より伺ふ喜助、

それと白刃の二腰を、元の如くに差し納め、またも納戸
へ持つて入る。

お紺は過ごす無理酒の、酔ひに心も乱れ足、

お紺「岩次さん、岩次さん」

と呼び立てられて

出て来る岩次、

お紺「オ、岩さんとしたことが、座敷を外してお前は
どい／＼」

岩次「ア、イヤ、ちよ／＼／＼ちよつと手水に」

お紺「あのまあ、嘘ばかり」

岩次「なんの嘘を言ふてよいものか、証拠人は北六、万
野。ソレ用意よくば早やこれへ」

と言ふ内

奥に声高砂、

相に相生の、松こそ目出度かりけれ

北六、万野が取り取りに、

渡盃、盃、硯蓋、銘々に携えて、

万野 「さあくく申しお紺さん、岩次さんと固めの盃、色直しはすぐに床入り」

北六 「サ、媒介役はこの北六、嫁君から飲んで差し給

へ」

と、無理に突き付け注ぎかくれば、

堪へ兼ねて駆け出る貢、お紺が盃引つたくり、落花微塵と投げ付けたり。

貢 「ヤイお紺、おのりやこの盃しては済むまい、済むまいぞよ」

お紺 「オ、誰かと思へば貢さん。お客と盃するがどうして済まぬえ」

貢 「イヤサ、ひと通りの盃なら格別。この盃ばかり差すことはならぬはい。こりやお紺、これまで言ひ交し

たこと皆忘れたな。モ最前から見てゐれば、ほてくろしい座敷ぶり。エ、もう了簡が」

と立ち掛かるを

岩次は引き退け、

炭 「ヤイくくくかす禰宜の大馬鹿者め。身が揚げ詰めの女郎に指でも差さば、骨も、脛も、ぶち折るぞよ」

と言ふに

万野がしやしやり出で、

万野 「コレシコレ貢さん、お前はんまあこちの内へ、誰が許してござんしたえ。お前の様な油虫はな、顔見るのも胸が悪い、アイ、起縁が悪い。サ、サ、ゝとつとゝ去んで貰ひましょ」

とずつかり言はれて

なほせき立ち、

貢 「こりや万野、わりやまあ味なこと言ふな。この貢が女郎の油をいつ吸ふたことがある。サ、サ、それ聞かう、それ聞かう」

万野 「オ、あのまあ白々しい顔はいな。コレシコレお紺さんえ。最前の文見せてやらんせ」

と言ふにお紺が懷より、取り出し渡す以前の文、

いちく貢が見てびつくり、

貢 「ヤア、こりやこれ、おれが名を騙つて女郎のお鹿へ無心の状」

万野 「なんと覚えがあらうがな」

貢 「イヤ、知らぬ。元より訳ある仲ぢやなし。こんな文遣つた覚えはない。あた汚いあのお鹿、風俗といひ面といひ、悉皆猿芝居のお染。ハ、余り呆れて物が言はれぬ」

と悪口聞いて、

駆け出るお鹿、貢が前に台白なり。

お鹿 「コレシコレ貢さん、最前から聞いてゐれば、お前はん余りぢやぞえ余りぢやぞえ。アイ、私やどうで、お紺さんの様に美しうはない。美しうはないけれど、顔でお客は取らんぞな。これ、肝心の時にはな、ぐつたり堪能さすによつて、ついに一日お茶引いたことは

ござんせぬ。お前もそれを見込みに、あの万野さんを頼んで付け文。その度々にア、コ、ゝ、これ見なされ。この通りにな、二歩ちよつとお貸し。ア、それまた、この状に、サ、三歩貸せ。エ、まだこゝにある、ソ、それ見なされ。また一両要るのと、モ親にも聞かぬ無心をば、五度や十度のことかいなあ」

貢 「エ、何を」

お鹿 「それに今さら知らぬとは、そりやお前、卑怯ぢや卑怯ぢや、卑怯ぢやはいな。筆先でたらし込み、身の皮剥いだ生盗人、エ、腹の立つ、腹の立つ」

と、言ひつゝ両手に胸づくし、引つ掴む手を

もぎ放し、

貢 「エ、様々の戯言。身不肖なれども福岡貢。そちらに無心言ふ様なおれぢやないはい。こりやお紺、これにはなんぞ訳がある。訳を言へ、どうぢや、どうぢややい」

万野 「オ、お前の内証の文が私の手に入り、腹の立つはこりや尤もでござんす。ガ申し貢さん、お前と私

が仲は人も知った、サ仲ちやぞえ。金の要ることがあるならば打ち明けて、かうくと言ふて下さんしたら、なんぼ甲斐性の無い私でも、三十両や五十両の金、満更^い否^なとも言ふまいに、僅か二歩や三歩の端^{はし}金、お鹿さんに無心言ふとは、モみすく知れた、いやさあ、見下げ果てた心ちやな。もう、もうく色も恋も醒め果てたはいな。それぢやによつてふつゝりと、お前のことを思ひ切り、岩次さんに靡^{なび}くのでござんす。アイ、そう思ふて下さんせ」

とけんもほろゝに言ひ放す。

貢 「こりややいお紺、おのりや氣が違ふたか、おのりや。モ流れの身にも真^{まこと}ある者と思ひ、取り交したる起請誓紙。またその上に大切、サア大事のことまで請け合ひながら、わりやそれぢや済むまいがな」

お紺 「エ、あた鈍^{どん}な、氣が違ひました。アイ、性根が腐りましたはいな。モウまひく、まひくまひ付かずと、早う去んで下さんせ」

と、口には言へど心には、『オ、道理でござんす道理ぢ

知らなんだ。チエ、知らなんだはい」

と、睨^{まなこ}む眼にはらく涙、

お紺が胸はなほ百倍、破り裂くばかりのせ苦^{くる}しさ、涙紛^{まぎ}らす煙草さへ、炎に咽^むせる思ひなり。

納戸に始終立ち聞く喜助、刀を持つて走り出で、

喜助 「貢さん、もうお帰りなされませ。悪いことは申しませぬ、悪いことは申しませぬ。サ、お預り申したお腰の物」

と差し出す刀

ひつたくり、腰に差す間も氣はしゆつくり、刀の違いに目も付かず。

万野は傍へ立ち寄つて、

万野 「コレシコレ貢さん、お前はもうそれで喋^{しゃべ}り仕舞ひかえ。オ、氣の毒やの。コレシコレ貢さん、ちよくくちよつとこちらへおいなんせ。サ、サ、早うおいなんせ、早うおいな、エ、早うおいなんせと言ふに。イヤナ二貢さんえ。最前から段々の失礼、サ、お腹が立とう、尤もでござんす、尤もでござ

や』と、言ふに言はれぬこの場の仕儀、血を吐く思ひ押し隠す、

知らぬ貢は腹立ち涙、

傍に北六高笑ひ、

北六 「ハ、ハ、ハ、こりや可笑しいはい。客が女郎の物騙^{だま}して取るとは、こいつは新しいはい、こりや新版ぢやはいハ、ハ、ハ。これが本の伊勢乞食ぢや、伊勢乞食ぢや」

と何がな当たる憎^{にく}体口、

岩次も片頬^{かたほ}にせゝら笑ひ、

岩次 「ア、イヤモ聞けば聞く程馬鹿な詮索^{せんさく}だはい。お紺が心底聞^{しん}く上は、今夜中に身請けして身が女房。ドレ、金の威光を見せうはい」

と、お紺が膝を飯枕、脛^{すね}ふんぞらす傍若無人^{ぼうじやくぶじん}。

見るに貢は齒^はぎしみ齒切り、

貢 「チエ、見違^{みちが}うたあのこゝな、ド、どう畜生。その根性とは知らず大事を明かしたが、チエ、無念なはい。ハア、とはいへおのれに限つてその様な根性とは

んす、尤もでござんす。ガ。私に免じてどうぞ堪忍して上げておくんなんせ。コレシコレ貢さん、なんぼお前がやき、やきくく、やき、やきくく思はんしても、ソレ、錢^{ぜに}の切れ目が縁の切れ目ぢやはいな。あのお紺さんを恨みなさるゝことは微塵も無いぞえ。お前のその素寒貧^{すかんぴん}を恨まんせ。モほんにくお前の様な貧乏神、片時置くのも内の不吉。サ、ハ、とつととお帰り、とつととお帰り、とつととお帰り。アイ、ようおいはなはつたえ。エ、ナニ、煙草入れ忘れたのかえ。ドレ、ドレく私が取つて来てあげませう、ナ、私が取つて来てあげませう。ソレ、ソレ煙草入れ。サ、持つてお帰り。エ、まだ他にお忘れ物。ナニお羽織、ホ、ハ、これは私も氣が付きませんでした。ドレ、ドレく私が取つて来てあげませう、ナ私が取つて来てあげませう。ソレお羽織。サ、お帰りに去にんかいな、去にならんかいな。エ、去にやがれ」

と突き出す門口、

堪へ兼ねて刀の柄、手は掛けながら忠孝の、二字に引かれて喰ひしぼる、

貢 「チエ、うぬ」

万野 「チ、なんぢやえ、なんぢやえ。ハ、齒を剥き出し、草来子をひねくつて、ア、何かえ、こりや私を切る気かえ。ヤ面白、面白。サ、さあく切られましょ、切られましょ。手々から切るかえ、首から切るかえ、おいどから切るかえ。サ、ハ、早うお切り、早うお切り、サ切りなんせ」

貢 「こりや万野、おのれはな」

万野 「なんぢやえ。サ早うお切り、さあお切り、さあお切り、さあお切り、エ、どつから切るのぢや、貢さん」

貢 「ムウ、エイ勝手にさらせ」

と道を蹴立てゝ立ち帰る。

万野は後を見送つて、

万野 「さあくくくく油虫の幕が切れた。岩次さん、北六さん、これからは色直し、お床入りの卵酒。

お紺さんも一所にサ、二階へ二階へ」

と言ふもそれ者の高調子。

お紺 「イエく、わたしやまだ岩さんに帯紐は得解かぬはいな」

炭 「ムウ、すりやまたなぜ、なぜ」

お紺 「さいなあ、お前の持つてあやしやんす袱紗包み、定めて色の起請か文。それ見ぬ内は、疑ひは晴れぬはいな」

炭 「ナニ、これか」

お紺 「アイ」

炭 「ア、こりやこれ、大切な、大切な、ムウ金比羅様のお守りさ」

お紺 「さあ、金比羅様のお守りにもせよ、私に見せて下さんせにや、真実心が解けぬはいな」

炭 「ムウ、ても扱も、女郎といふものは、マ、疑ひ深いものだハ、ハ、ハ。エ、是非に及ばぬ、大切な品なれども、そちにしつかり預くるぞ」

お紺 「アイ」

『アイく合点』も一寸逃れ、嬉しさ怖さ胸震ひ、足を

踏みしめ段梯子、二階へこそは上り行く。

岩次は後に声潜め、

炭 「こりや万野、身が刀を早やこれへ」

と言ふに

心得暖簾の内、刀抱へて走り出で。

渡すを

取つて打ち眺め、

炭 「ヤア、こりやこれ身が刀ではない」

万野 「エ、そんなら貢が取り違えて去んだに違ひはない」

と言ふに

北六勇み出で、

北六 「なんだ、貢が刀を取り違えて去んだとは天の与え天の与え、天の与え。これこそ望む青井下坂」

炭 「ア、イヤく、それが大間違ひだはい。最前秘かに貢が刀と身が刀、茎を揃え置いたに、取り違えて去をつたが本の下坂」

万野 「エ、鈍な、私がちよつとひと走り」

喜助 「ア、イヤ申し、そのお使いは私が参りませう」

と言ひつ納戸を出る喜助、

炭 「オ、喜助か、よく気が付いた。貢に追つ付き腰の物を替えて来い。サ早う、早う」

と手に渡せば、

喜助 「まつかせ合点」

と、駆けり行く。

万野は俄に心付き、

万野 「これく申し岩次さん、お前はまあ滅相なお方ぢやはいな。あの喜助はな、慥か貢が譜代の家来ぢやといな」

と聞くより

岩次は興醒め顔、

炭 「さあくくく壺ぢや、壺ぢや」

万野 「岩次さん、壺とは何壺ぢやえ。水壺かえ、塩壺かえ、たゞしは子壺かえ」

炭 「こりやくく万野、慌てな、慌てな。と言ふて身共

も慌てゝをるはい。こりやく／＼万野、そちは喜助に追つ付いて刀を取り、貢が刀と替えて来い」

万野 「ハイ、ハイ／＼、心得ました。貢に逢ふて刀をたくり、きつとお渡し申しませう。どりやひと走り」

と身繕ひ、棲引き上げて、

万野 「オ、イ喜助どん、喜助どん」

と声は先、体は後に心も空、足を早めて、

万野 「ハ、ハ、ハアしんど、ハアしんど。ちよつと待つて、待つて、喜助どん、喜助どん、オ、イ喜助どん」

と、走り行く。

岩次は後を見送つて、

岩次 「万野が戻つて来るまでは、皆を相手に二階で飲まう。さあ／＼こちへ」

と引き連れて、二階へ

奥庭十人斬りの段

こそは行く後へ。

また引つ返す福岡貢、取り違へたる脇差の、身は正真の下坂とも知らず知らねば気もそゞろ、門の戸引き開け内に入り、

貢 「誰もゐぬか。こりや喜助、喜助、万野、万野はゐぬか。エ、をらぬか」

と、見廻す折しも

遣手の万野、息もすたく／＼立ち戻り、顔見合はせて、

万野 「ヤ貢さん、ア、しんど。貢さん、お前はんもいかに慌てるてゝ、腰の物を取違へるといふ様な、粗相なことがあるものかいな。その刀こつちへ」

と取りに掛かるを

突き放し、

貢 「イヤ、身が刀から先へ渡せ」

万野 「エ、まあ渡さぬとて取らずに置かうか。この刀」

と、取りに掛かるを

続け様、打てばばつしり鞘割れて、思はず知らずひと

刀、

万野 「ア、ちめた、ア、ちめた。ア、貢さん、お前はん

切りなはつたな。ア、レ／＼」

と泣き叫ぶ、

声立てさせじと口に手を当て、見れば血潮に身は紅、

貢 「南無三、手が廻つたか。もう百年目」

とまたずつかり、

切られながらに逃げ行くを、

髻^{たがひ}挿んで引き戻し、肋^{あはら}をぐつとひと抉^{えぐ}り、

その儘^{まま}息は絶え果てたり。

折しも奥より北六

岩次、

後に続いて出て来るお鹿、

お鹿 「岩次さん、北六さん、北六さん」

と尋ぬる

向うに立ち塞がる、

お鹿 「ヤア貢さん。アレ人越し、人殺し、ア、レ／＼」

と言ふ声に、

二入 「こりやさせぬは」

と北六

岩次、止めに掛かるを

身をかはし、

左へ廻る北六を、

肩先下がりに切り付くれば、

岩次 「こりや叶はぬ」

と機転の岩次、奥庭差して、逃れ行く。

お鹿は足も地に着かず、転^こけつ、まるびつ這^はひ廻る、

貢 「おのれお鹿」

と言ふ声に、

思はず知らず立ち上がり、逃げ行く

後ろを逃^{のが}さじと、踊り上つて唐竹割^{からたけわ}り。

物音聞き付け勝手より、起番男^{おきばんおとこ}

仲居

下女、

仲居 「物騒がしきは何事」

と、差し出す仲居が手燭の光

振り向く拍子貢が顔、

見るより三人、足わなく、

仲居 「ヤレ、人殺し、人殺しだ」

と、言ふ間も

待たず左より、右の腕を切り落す、

『ウン』と仲居が即死の有様、

見る兩人が狼狽え廻り、奥と表へ逃げ行く男、

『外へ出でなば面倒』と、声をも掛けず後ろ袈裟、返す

刀に下女が首、水もたまらず切り落す。

音も分からぬ寝惚けの、子女郎が出づる足元に、糊に滑

つてばつたりと、転ける拍子にお鹿が傍、

子女郎 「オ、この様な所に水を流して、オ、ちめた、

オ、ここに寝てぢや是誰ぢやいな。これ、起きんか

いな、起きんかいな」

と言ひつゝ立ち寄り、見てびつくり、

子女郎 「ア、レ、お鹿さんが切られてぢや、ア、レ

く」

と言ふ間もなく

片足丁と切り放せば、

片足立ちに、ひい、ふう、みい、よろ／＼と鉢前

の、手水鉢に取り付いて、その儘息は絶え果てし、

無惨といふも余りあり。

貢 「さあこの上は岩次一人、取り逃しては刀の在り

処。この一間こそ、ム、それ」

と、伺ふ内より

泊り客、

泊客 「ア、。一杯機嫌にぐつたりと寝てのけた。酔ひ覚

めの水の心地や、朝桜か、ハ、ハ、ハ。オ、こりや火

が消えてあるはい」

と、言ひつゝ出づる廊下口、

伺ふ貢が刃の光

泊客 「こりや堪らぬ」

と逃げ行く庭先、

逃ぐる人影、

岩次と心得、追ふて行く。

寝間より出づる相方女郎、貢を客と心得て、

相方 「申し、この人さんはいな。どこへ往きなんす。申

し、そちらは前裁ぎますよ、落ちなんすなえ、危なう

ぎますよ。水ぎいますか、コレシコレ、水ならこちら

にあるはいな」

と、しごきも脇へしどもなき、裾もほらく、追ひ行く

女郎、

振り返つて拌み打ち、

客はほう／＼樹木の影に、息を詰めてぞ屈みゐる、

『こは心得ず』と灯籠の影に透かして、

貢 「確かに岩次、ごさんなれ」

と、襟際掴み引き出だし、土に差し付け躡り付け、

貢 サ、下坂の刀はいつくへ遣りしぞ。真直ぐに白状ひ

ろげ」

と、拉ぎ付けられ、

泊客 「ア、申し、私はなんにも知りませぬ」

貢 「ヤア今になつて知らぬとは卑怯至極。言はぬとて

言はさいで置かうか」

と、言ふ内に来る人音に『南無三』と、躊躇ふ隙に跳ね

返し、

逃げ行く後を

横なぐり、直ぐに立ち寄り顔見れば、

貢 「ヤア、こりや岩次ではなし。チエ、取り逃がせし

か、残念」

と、拳を握りゐたりける。

お紺は驚き心も空、転けつまろびつ走り寄り、

お紺 「貢さん」

貢 「ヤアお紺か、覚悟致せ」

と突つ掛くる、

お紺 「マ、まあ待つて下さんせ。腹の立つは尤もなれ

ど、これには段々訳のあること」

貢 「ヤ、なんの訳のこと」

と、また振り上げる刀の下、

お紺 「これいなあこれ、気を鎮めてとつくりと、これ見

て疑ひ晴らして」

と、投げ出す包み

手に取り上げ、

貢 「ヤア、こりやこれ折紙。ム、そんなら宵のつれなきは」

お紺 「さいな、お前に忠義が立てさせたさ、どうやらかうやら岩次を騙し、首尾よう手に入るこの折紙」

と、言ふに

貢 は『ハ、ア』今さらに、後悔涙の折からに。

喜助 は心ならざれば、『もしや』と思ひ立ち戻る、

貢 「喜助か」

喜助 「ム、若旦那さん、してこの有様は」

貢 「どうも堪忍ならぬ故、喜助、許してくれ」

と刀の柄に手を掛くれば、

その手を押さへて、

喜助 「こりや、狼狽えてなんとされます」

貢 「オ、狼狽えた、最前そちに預けた刀」

喜助 「さあ、それはそこに持つてござるのが本の下坂」

貢 「ヒヤア、そんならこれが。エ、有難や、有難や

な」

喜助 「さあ申し、二色共に揃ふ上は、一時も早う万次郎様へ、早や早やお渡しなされませ」

貢 「喜助、お紺、段々の心遣ひ、なんにも言はぬ、忝い。して、この場の首尾は」

喜助 「ヘイ、私が飲み込みました。後構はずと万次郎様へ」

貢 「ム、しからは喜助、後を頼む」

と言ひ捨てゝ、立ち出でんとする所へ。

小蔭をぬつと徳島岩次、

岩次 「ヤアどこへく、大事の刀こつちへ渡せ」

と、打つて掛かれば

身をかはし、

貢 「シヤ良い所へ徳島岩次、おのを方々尋ねしにこゝへ出でたは百年目」

と、打つて掛かれば

切り払ひ切り結び、隙を見合はせひと刀、『ウン』と倒るを

乗つ掛かり、

貢 「恨みの刀、受け取れ」

と、差し通されて七転八倒

心地よくこそ見えにけり。

傍にお紺は心せき、

お紺 「夏の夜なれば早や明け方。少しも早うその刀を」

貢 「オ、言ふにや及ぶ。忠義を立つるも二人の情け」

と、心も勇む足勇む、忠義に心勇み立ち、

屋敷を差して急ぎ行く